



発行責任者:保坂 義秀 (アーク福音ミニストリー代表、聖書キリスト教会長老)

発行所:アーク福音出版 285-0923 千葉県印旛郡酒々井町東酒々井 3-3-34

TEL043-496-2727 Fax043-496-2729 E-mail : ark-plan@cameo.plala.or.jp

ホームページ URL: <http://ark-fukuin.com/>

ゆうちょ銀行
記号 10560 番号 29284321
アーク福音ミニストリー

特集 創世記一章三節の光の解釈をめぐる
— 創造論と異端 —
CRJ顧問 野口 誠(牧師)

異端の特徴は、信仰的に本物のよう
に見せかけて、内実はにせ物であるこ
とである。たとえば言えば、羊の衣を
着たおおかみである(マタイ七・15)。
私がここで強調したいことは、聖書解
釈で自分では気がつかないでサタン
の思いつばにはまり、他者にもそう教
える異端である。

たいていのキリスト者と一般人は、
創世記の記事を神話と誤っているが、
聖書信仰に立つキリスト者は、創世記
一章の創造の日をできる限りありの
ままにとらうとする。その結果、自分
で納得できるように「主」あつては、
一日は千年のようであり、(Ⅱペ
テロ三・8や詩九〇・4)をだてにと
つて創造の一日を長い年月とする長
期説を主張する。しかし主にとつては
そのようであっても、人間にとつては
一日は一日である。しかもその長期間
がどのくらいかを決めるすべはない。
それで結局、気づかずに有神論的進化
論に立つのである。

他方、創造の一日をはじめから文字
通り24時間とするキリスト者に対して

てサタンが働きかけないはずはない。
こういうキリスト者の中には創世
記一・3の光を神による無からの創造
にとるだけでなく、黙示録二一・23や
二二・5をだてに太陽の光も要しない
神やキリストの栄光の光と解する者
がいる。

実はこの寛容がわななのである。グ
ノーシス主義という新約時代の最大
の異端の中心思想は、霊的なことだけ
が善であつて、「物質は悪である」と
いうことである。

この異端は、悪である物質とは関係
がない栄光に輝く至高神と悪なる物
質を造ったデミウルゴスという非常
に劣った造物主との二柱の神々を信
奉するのである。創世記一・3の光を
神・キリストから発せられた光とする
解釈とその光を神が造った光とする
解釈との両方を容認することは、光を
発する至高神と光を造った造物主の
二柱の神々を信奉するグノーシス主
義に通じることとなるのである。

Y・H師は、その著書の中で創世記
一・3について神の光はついでに発する光

の創造を強力に主張し、かつその論を
念入りに推し進め、生物にとつての光
と昼および闇と夜の必要性を力説す
る。それだけならば聖書的に何ら問題
がないどころか、それは至極当然なこ
とであると思う。

ところが、Y・H師は、誰かに神・
キリストの光説を示唆されたのか、不
本意ながら木に竹をつくかのように
「創造主は先ず、いのちの住める環境
を造り始められました。(Ⅰ)一日目
光を造られました。この光は太陽の光
ではなくて、創造主、御自身からの光
のようです。・・・」と記している。

Y・H師は、神が光を造ったこと、
その光が創造主「自身からの」(栄光
の)光のようですという。

これを合わせると神は、「自身」の栄
光の光を造られたことになる。さらに
神の栄光の光は、神の本質から出る光
であるから神が「自身の栄光の光を
造ったことは、即、神が「自身を造っ
たことにもなり、神は造られたもので
あり、被造物ともなりかねなくなるの
である。

前者は二柱の神々を立てることで
グノーシス主義に通じる。そして後者
は聖書の神の被造性に通じる。それだ
けに創世記一・3の光については、よ

りくわしく究明する必要があると思
うのである。

「神は『光があれ。』と言われた。
すると光があった。」(創世一・3)の
中の光について四つの解釈がある。

(一) 神に創造された光説

神が「光あれ」と言われると、それ
までなかった光が存在したので、これ
こそまさに神のこゝばによる無から
の光の創造である(詩三三・6、9)
という説。

(二) 神・キリストの光説

神が「光あれ」と言われると、光が
あった。この光の実体は、「都は、日
や月がそれを照らす必要がない。神の
栄光が都を明るくし、小羊が都のあか
りだからである。」(黙示二一・23「参
照」同二一・5)。「すべての人を照ら
すまことの光があつて、世にきた。」
(ヨハネ一・9)とある通り、初めか
らあり、永遠の御国で輝くまことの光
であり、御子イエス・キリストは、山
上の変貌にて、み顔は太陽のように輝
き(マタイ一七・2)、創造の時点で、
地上を照らすまことの光として地球
を照らされたのであるという説。

(三) 回復説

創造主の計画は、初めに造られた世
界を再現することである。したがって
創世記一・3では創造主の光に照らさ
れ、黙示録では、再び創造主の光に照
らされるのである(二一・23、二三・
5)。創世記は第一回目にシャカイナ
グローリー(神の栄光)で始まり(創
世一・3)、黙示録はシャカイナグロ
ーリーで終わる(黙示二一・5)とい
う説。

(四) 太陽の光説

創世記一・1の「初めに」という時
に太陽と光はすでに創造されていた。
神が「光があれ。」といった時から最
初の一日が始まったが、この日に神が
光を創造されたのではない。この時以
前から太陽は地球に向けて光と熱を
発していたが、地球をおおっていた厚
い黒雲や水蒸気のために地球の表に
到達していなかった。この最初の日に、
太陽の光が地表に到達したという説。

「私見」

私は、創世記一・3の文脈から判断
して、それは、みこばによる光の創
造と解し(一)神に創造された光説を支
持する者である。

この立場から他の三つの説を考察
するところとする。

(一) 神・キリストの光説について

「ジョン・モリスの見解」
ジョン・モリスは創世記一・3では
「光あれ」の結果として「すると光が
あった」とあるが、「大空があれ」の
ばあいは「神は大空を造った」(創世
記一・7)と明記しているので光の方
は、他の解釈の可能性を示唆するとい
う。

この解釈は創世記一・3を神による
無からの創造ではなく神とキリスト
との栄光の既存の光の到来を支持す
ることになる。

しかし、大空と分離するものにつ
いての神の希求の仕方、原文では
「大空があれ」と「分離するものがあ
れ」であるので、「光があれ」の答の
ようにすると三つとも「くがあった」
「くがあった」「くがあった」が連続
するのでその単調さをさけるために
それぞれ別な表現が使われたと思わ
れる。

「文法上」

「光よ、あれ！」(創世一・3)と
いう訳をよく見かけるが、それはハブ

ル語原典からは適切ではない。「くあ
れ」の動詞の主語は一人称(相手)「あ
なたは(あれ)ではなく、三人称(第
三者)「それが(あれ)である。それ
ゆえ「光よ」と相手に呼びかけるのは
適切ではない。「光があれ」が正しい。

「釈義上」

(二) 神・キリストの光説の解説の中に
は、比喩的表現と物理的表現との混同
が見られる。山上のキリストの変貌
(マタイ一七・1-18)や新天地
の都での神・キリストの栄光(黙示二
一・23、二二・5)は、目に訴える
物理的光である。しかし「すべての人
を照らすまことの光があつて、世にき
た」(ヨハネ一・9)における「すべ
ての人を照らす光」とは、物理的光そ
のものでもなく、物理的光を発するキ
リストでもない。それは隠喩であつて、
すべての人を霊的に啓発する、あたか
も暗やみを照らす光のような存在で
あるキリストという意味である。「キ
リストは世の光である」における世の
光は、隠喩であり、「キリストは世の
光のような方である」の「くのような
光」をつけるとそれは直喩となる。

ヨハネの黙示録で将来成就するこ
とになっている預言の新天地にあ

る都の中の神とキリストの榮光の光を引き合いに出して、神がやがて創造する太陽の代用をさせるためにそれに似せて形造った(ヘブル語「ヤーツアル」)光を神とキリストの既存の榮光の光と解するのは積義的には文脈を無視した余りにも飛躍しすぎる解釈と言わざるを得ない。

「太陽と光」

神は、動物、植物を含む自然界を造るにさいし光とやみが必要であるとみてやみは造っても光を造ることに何か不都合があったとみるのか。「神は『光があれ。』と言われた。すると光があった。」(創世一・3)を神にやるそのみことばによる光の創造と素直にとることに何か問題があるのだろうか。

太陽なしの光の存在には何か違和感があるのだろうか。太陽がなくても稲光にせよ、電球やろうそくの光にせよ、バッテリーによる光にせよ、その存在は杖拳にいとまがないはずである。ここで回復説(創造者の計画は、初めに造られた世界を、再び回復する)「創世記一章と黙示録二二章との関係」(1)が主張されるのであれば、神が創造し(イザヤ四五・7)、神が夜

と命名したやみ(創世一・5)が黙示録の聖なる都(黙示二一・1)に回復しないのはどうしたことか。

「創世記一・3とヘブル語」

「光があれ」は「イヘー」(それが)あれ、オール(光が)であり、これはそれまでに存在しなかったものを存在させることである。これに対してすでに存在しているものを呼び出すばあいは、「光が」現わす「イヘラヘ」(「イなるはずである」(創世記一・9参考))。

そこで「創造主訳聖書」を見ると、「創造主が一声『光は、出て来い』と仰せられると、光が出て来た」(創世一・3)である。「出て来い」とは「(何処)と」から出る「という行為と、やうに「来る」という行為がいつしよになった動詞である。この日本語からは、ある所にすでに存在しているものに對して、そこから出てくるものという呼びかけである。

訳者であるR・O師の「創世記一私訳と講解」には、創世記一・3の「光は神から出る」ということである。そしてその時点で「太陽はすでに創造されていた」とある。この問題については四太陽の光説を参照。

「創世記一・3にある定動詞(そこで」

使用されている動詞の活用形(は「イヘ」)で、日本語訳は「何々が(あれ(に存在せよ))」である。この定動詞を文法的に説明すると、パアル能動態(指示形II未完了三人称男性単数(第三者にたいする話者の希求)であり、その原形は「ハーヤー」で、その意味は「何々が(ある、すなわち存在する)であり、もう一つの意味は何々は何々(は)ある」というものである。これは英語のbe動詞に相当する。そしてその定動詞の主語は、三人称男性単数であり、(ここで)の主語は「光」「オール」である。

したがってこの動詞そのものには、本来どこどこからという出所を意味する要素はない。「光は、出て来い」という訳は、訳者が光はすでに存在しているという解釈に基づいて、その個人の解釈を訳の中で表したのである。この訳だけを読む者にとっては、神がそのみことばにやうして光を無から創造したという解釈は出てこない。

ここで読者への私の要請は、問題の箇所が、ヘブル語原典ではどうなっているのかを知っていただき、自分で判断してもらいたいことである。

「聖書による聖書の解釈」

実は、創世記一・3の光が神・キリストの光でないことは、使徒パウロによる創世記一・3への言及とその解釈(第2コリント四・6)から明らかなのである。パウロにとって「光があれ」(創世一・3)で光の無からの創造は明かであるが、神・キリストの光説の出現を予測するかのように光が神とキリストの榮光の光でないことをはっきりさせるために「やみの中から」「エクストウース」を追加することによって光の出所(やみという光が存在しない所、即ち無)を明確化しているのである。

「やみは光の欠如ではない」

やみは、主なる神による創造の対象である(イザヤ書四五・7)。したがって動詞は「創造する」(バーラー)が用いられているのに対し、同節で光は「形造る」(ヤーツアル)が用いられている。そこでまた光の既存性に心を開ける傾向があるが、実は、ここで光とやみとが同じ節に並列しているのは、その背景が創世記一・2、3のやみの中への光の創造だからである。ここであえてやみに「創造する」を用い、光に「形造る」を用いたかは文

脈から十分推測できる。それは、神が太陽を創造する前であるから光をして太陽の代用をさせるためにそれに似せて光を形造ったからである。

(三)回復説について

この説によると創造主の計画は、はじめに造られた世界を、再び回復することであるとされる。そして創世記一章の記述は、黙示録二二章の記述と密接な関係があることが指摘される。

たしかに創世記二・9で神は園の中央にいのちの木を生えさせたが、人の墮落後は、ケルヒムと燃える炎の剣で守られた(創世三・22)。しかし黙示録二二・2では都の大通りの中を流れる川の両側には、その葉が諸国民をいやすいのちの木がある。

黙示録の都では、創世記三・22でのいのちの木にたいする禁断はとかれていた。創世記と対比したばあいは、この解禁は回復ということができるが、全体的に、とくに創造論的に見たばあいは、「御座におられるかたが『見よ、わたしはすべてのものを新しくする』といわれた」(黙示二一・5)ように「聖なる都」(黙示二一・2)は回復や刷新(リフォーム)どころではなく、すべてを新しくし、新天新地を出現さ

れるのである。「以前にあった天と地は消え去り、海もなくなってしまう」(黙示二一・5)のである。

まず新天新地は、それまでの消え去った天と海のある地とは異なっている(黙示二一・1)。新天新地の都では太陽や月がそれを照らす必要がないが、創世記一章の先の天と地では、それらの光が必要であった。創世記一・3の光が神とキリストの栄光の光であったならば、神が「やみ」とそれをあえて命名した夜もなかったはずだし、あかりも太陽の光も必要なかったはずである。ところが実際はそうではなかったのである。回復説は聖書的に根拠はない。

(四)太陽の光説について

太陽の光説によれば、神が「光があった」と言われた時から最初の一日が始まった。それゆえ、この日に神は光を創造したのではなく、太陽も光も初めに創造されていたので、その時から太陽は地球に向けて光と熱を発していた。しかし地球をおおっていた厚い黒雲や水蒸気のために光と熱が地球の表に到達していなかったという。

ところが十戒の4戒には「主が六日のうちに、天と地と海と、それらの中

にあるすべてのものを造った」(出エジプト二〇・11)とある。それを言い換えればいわば容器としての天と地と海に対して、それらの中にあるすべてのもの、つまり中味を別個に造ったのである。

この両者を敷衍すれば、それは創世記一・1-31になる。実際は、十戒のこの部分は創世記一章のすばらしい要約なのである。したがって神が時間(はじめに)と無限の宇宙空間と地球とを創造した(創世一・1)ときには、太陽も光も創造されていなかったはずである。

神は創世記一・3においてはじめそのみことばによつて光(オール)を創造したことになる。その光は、四日目(それが収容される)「光るもの」マール「光の容器」発光体が造られて、その中に収容されるまで太陽のように「一カ所にまとめられて(localized)、太陽の代用をしたはずである。

またN・Y氏は「神が『光があれ。』と仰せになった時から最初の一日が始まりました」という。N・Y氏は創世記一・1-2を一日の中に含めていない。これは一般的な解釈であるが、聖書的ではない。十戒では天と地の創

造は六日間のうちに入っているので、創世記一・1は創造の一日目にはいるのが正しいと思われる。

「まとめ」

創世記一・3には「神は「光があれ」と言われた。すると光があった」とあるだけである。ヘブル語では、その動詞の主語は三人称(「それが」あれ)なのであるから、訳としては「光があれ」という神の希求である。

この希求は、次につづく大空が存在するようにとの希求とそのため水と水とが分離するようにとの希求と同じであり、新たなものへの希求であつて既存のものへの希求ではない。

このようにその光は、既存の光ではなく、これから光が存在するようにとの神の希求が述べられているのである。

したがつてこの光を既存の神やキリストの栄光の光とか、既存の太陽の光と解するのは無理があるように思うのである。このヘブル語の指示形(ジァッシュヴ「希求形」)は、それまで存在していない光が存在するようにとの神の強い要求の表れなのである。したがって使徒パウロが、「やみの中から(神から)でも、キリストからで

も、太陽からでもなく、光が照りいでた」(第2「リソト」四・6)と解釈したのは、聖書の文脈からも入フル語とギリシア語の文法からも正しいのである。

【あじがけ】

私のこの発言は、これまでの諸説を非難するのではなく、お互いがより神の御旨とする真理に近づくための踏み台となることを目的として書いた批評である。一般の常識として批評と批評を区別すべきである。前者は破壊的であるが、後者は建設的なのである。批評がない所には向上は望めない。これを読まれる方で私の見解になにか意見があれば、ぜひきかせていただきたい。

Eメール(nobuchi318@gmail.com)

またはFax (0299-23-6345)

その他の方法で聞かせていただきました。

【参考文献】

(一) 神に創造された光説
【独訳】聖書入フル語原典入門(監修野口 誠)(出版予定) 192頁。

(二) 神・キリストの光説

(1) 「創造」一九九九年3巻2号(創造科

学研究会) 5頁。

(2) 「創造」一九九九年3巻1号(同前) 5頁。

(3) クリエーション・リサーチ二〇〇六年12号(同前) 11頁。

(4) 創造論について共通見解(最終案二〇一〇年) 2頁。

(5) 堀越暢治「聖書による天文学―これだけは知っておきたい」(エターナルライフ プロジェクト二〇一〇年) 7頁。

(6) 尾山令仁「創世記―私訳と講解―」(羊群社一九七五年) 44、45頁(光について)、51頁(太陽について)。

(7) 創造主訳聖書「旧約聖書」(創造主訳聖書刊行会二〇一三年)(尾山令仁訳) 旧約1頁。

(三) 回復説

(1) 「創造」二〇一一年5巻2/3号(創造科学研究会) 26頁。

(2) 中川健一メッセージシリーズ「創世記」1回〜20回メッセージアウトプライン

二〇〇八年(ハーバスト・タイム・ミニストリース) 10―13頁。

(四) 太陽の光説

バイロン・C・ネルソン著 山岸訳(改訂版二〇〇八年)の中の付録五 山岸 登著

(エマオ出版) 375―376頁。

献 堂

東畑 忍(文書伝道者)

「形あるものは滅し生あるものは死す」。誰の言葉でしょうか。形あるものは年とともに壊れ、生きとし生ける者は死んで行くのが世の理でしょう。これは時がなせることと聖書はいつています。私もこの年まで生きる時代も変わり身辺も変わりました。変わりないのは神さまだけ、この神さまにすがり、助け守られることはなんと辛いことでしょうか。

昭和四十六年にフランス・ソリー宣教師の指導のもとに建てた煙樹ヶ浜教会の会堂も老朽化してきました。それに二度の床上浸水被害にもあっていましたので、ここで新しく会堂を建てようと思いました。それで皆さんと協議の上同意を得て、またある婦人の協力を頂いたので、新しくできた町道に隣接している私の土地に会堂をお捧げすることができました。

献堂式は平成二十二年九月二〇日でした。そして名前は地名をとって、美浜グレイスキリスト教会と改めての発足となりました。

お捧げできたのもキリストさまに、滅びや危険から救われたからです。救

われていなかったなら、多分この世の者ではなかったと思います。あの苦しみを思えば、神さまの御用のためにお捧げできるのは、此の上なき喜びに感じます。

それと喜多姉妹との出会いがあったればこそでした。姉妹との交わりによって、神さまに近づき、神さまの恵みを知り信仰が練られたからです。それゆえに姉妹の苦しみは決して、無意味なものではありませんでした。

体の癒やしには至りませんでした。が、姉妹が平安を与えられた事は魂の救い、闘病への勝利と思っています。私は姉妹に言いたい。「喜多さんここに会堂を建てられたのも間接的にあなたのおかげだよ、あなたの闘病は意味のないものではなかったんだよ、あなたの苦難の道は神さまへの栄光に繋がっていったんだよ」。

聖書にこう書かれています。

「神はこの世の愚かなものを選び、この世の弱いものを選ばれたのです。又この世の取るに足りないものや見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。

これは、神の御前でだれをも誇らせな

いたためです。」

「この世にあってなきに等しいものを神さまは選ばれたのですとありますように、いとも小さい私を神さまは、選んで下さったのです。」

聖書によれば、キリストさまは三十歳の時、神の国の福音を伝えられました。その時、人の思いもよらぬ多くの奇蹟の業をなして御自分を神の子であると示されました。多くの人の病を癒やされ、語られた福音のごとくは、聞く人に感動を与えました。その評判と人気は大きく熱狂的なまでに、群衆はキリストさまにしたがいましました。

これが当時のユダヤ教の指導者たち祭司、律法学者、長者のねたみをかう結果となりました。このままではいけない、イエスを無きものにしてしよう。これが彼らの考えでした。そして、イエスさまをおとしいれて裁判にかけました。



裁判官ピラトはキリストさまに罪ありと認めませんでした。祭司長はキリストさまに言ったのです。

「あなたは神の子キリストなのかどうか、言いなさい」

イエスは彼に 言われました。

「あなたの言うとおりにです。人の子（キリストご自身）は力ある方の右の座に着き、天の雲に乗ってくるのを、あなたがたは見るようになります」すると大祭司は怒って「これは神への冒瀆で、死刑に当たる」と言って死にわたされるのです。

聖書によれば、人類は神の前には罪あるものであり、人はこの罪の故に滅びるとされています。神さまはその人類を罪から救い、永遠の命を与えるために、「自分のひとり子であるキリストさまを身代わりとして、十字架にかけ人類の罪を負わせたのです。」

キリストさまも神さまのみ心をこ存じのゆえに自らを世の罪人の身代わりとなられて、十字架にご自身を罪の身がわりとして捧げられました。そしてキリストさまは十字架上で祈られました。

「父よ。彼らをお赦しください」

その祈りの中に、私にもあなたにも罪のゆるしがあるんだよと先生に教

えられました。

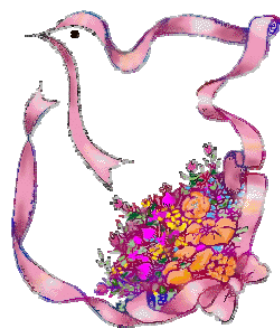
キリストさまは神の力によって死から復活されました。人類の起源からいまだかつて、死から生きかえった人はいません。復活されたキリストさまはガリラヤの地で多くの人の前で天に昇って行かれました。そして神さまの右に座し、いっさいの権威をもって裁かれますとともに、信じるものの祈りをとりなしてくださいませ」と、聖書のいうところです。

キリストさまは申されました。「わたしは教会を建てて」

教会はキリストさまの体です。私のように大きな罪人や喜多さんのような苦しみの人々の存在は例外かもしれませんが、それもキリストさまが招いておられます。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

教会は人々の救いの場所、憩い場です。救われた人は神の子とされます。したがって、私たちは神の子とされたのですから、神さまを父と呼び信徒は互いに兄弟姉妹と呼びます。そして神さまの御加護と助け、喜びと平安のうちに生かされます。



愛のことば

大家 典子 (教会奉仕者)

イエス・キリストの救いを受け入れて三十八年になりますが、振り返れば、最悪の状況のときに、いつも最高のギフト、神さまからの愛のことばをいただけてきました。その中でもとっておきのギフトの話をさせてください。

ずっとお話しさせていただきましたように、私の夫は、約十一年の間に三回の脳腫瘍の手術をして、三回目の手術の後、脳梗塞により左半身麻痺となり、リハビリを続けていましたが、リハビリの効果もないまま、三回転院しました。

最後に受け入れてくれた病院は、比較的きれいな病院でしたが、重度の認知症高齢者のための病院という感じでした。その中にまだ若い夫がひとり入っていることに、たとえようのない悲しさがありました。病院を転々とし

て、ついにこんな病院に来てしまったという気持ちは拭えませんでした。

そんなある日、いつものように病院に見舞いに行き、その日は遅くまでいられたので、ゆっくりと夫の夕食の介助をしていました。その時突然、「お父さん、愛している。」と言いたくなかったので、そう言いました。するとほっきりと聞き取れる声で「お母さんも頑張ったね。」と言ってくれました。

私は、この一言で、いつも私ばかり与えているとどこかで不満に思っていた思いが、まったく消えているのに気がつきました。涙が出てきました。こんな風に前に会話をするのは、入院してから初めてだったので。病院での闘病生活に入って一年以上経っていましたので、約二年ぶりに昔のような会話ができたのです。奇跡でした。彼の意識が混濁していることも多かったし、私を看護師と間違えることもあったりでしたから。

病院を出て歩きながら、これが夫婦としての会話の最後かもしれないと思いました。(果たしてその通りでした。)そしてバス停でバスを待っているとき、突然、「あなたは、私のもの。」とほっきりと聞こえたのです。それは、耳に聞こえる音声ではありません

せんでしたが、否定できないほど明確に聞こえました。

そのことは聞いた途端、私の心は喜びで満ちあふれました。ちよっと前まで、これが夫婦の最後の会話かなととてもさびしい気持ちだったのに、です。

家に帰ってから、聖書の中にこのことばがあるかどうか、調べてみました。するとあったではありませんか！

「・・・あなたはわたしのもの。」(イザヤ四十三章一節)

このことばを主が私に直接語ってくださったときから、約十九年の月日が流れましたが、いまだにこのことばは、私に大きな励ましとなっており、生きる力であり、主と私をつなぐ大切なことばであるのです。主をとても近くに感じた時でした。

私は、主に愛されている。私は、主のもの。そう心の中で繰り返します。この十九年の間、何度も何度も、あのととき語られた主から私への愛のことばを思い出し、主と自分の関係を確認し、平安を維持することができました。私にとってほんとうに大切なことば、大切な宝石です。誰にも奪い取れない宝石です。

このことばは、私の大きな拠り所

です。これがあから周りの人たちのために愛をもって奉仕することができるようになります。それがなければ、だぶん奉仕することによって、自分の存在価値を得ようとすると思います。

「あなたは、わたしのもの。」このことばによって、主から個人的にとても愛されていることを知りました。だからもう十分満足なのです。地球上のどんなに愛ある人から愛していると言われてもこれほどの満たされた気持ちにはならないでしょう。それもずっと続いているのです。十九年の間、少しも色褪せることなく私の心に響いています。

この愛のことばがあるので、他人から何かを得ようと思わないですみます。与えたのだから何か報酬を得たいとか、ありがたこの言葉がほしいとか思わずにすみます。神に愛されていることを深く知れば知るほど、神とのつながりが深いほど、まわりの人や物や行為で自分を満たす必要がなくなります。永遠に変わることのない神のことばに頼るのは、こんなにも満たされる素晴らしいことなのです！

キリスト教は、宗教ではなく神と人の個人的関係であるとよく言われますが、ほんとうにそうだと思います。

「・・・永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。」(エシヤ書三二章三節)



神のみちびきに

—私の信仰履歴・十六—

植草 榮一牧師

「慰めよ、慰めよ、わたしの民を」とあなたがたの神は仰せられる。

イザヤ書四十章一節

余にもいろいろな出来事があった1990年も年は暮れて、クリスマス月の月になった。この年の十二月は、日曜日が五回、今までの教会での行事予定を進行するにおいては、十一月最後の日曜日にアドベントに入り、そこからクリスマスに向かって準備して行ったが、今度からは自分たちだけで初めから、文字通り一から、クリスマスを祝う準備をしなければならぬ。十二月は教会にとって教会員が心を

一つにして迎えなければならぬ月であり、とにかく一年で一番活気に溢れる月でもある。

だが今年は、突然の出来事から一定の方向に向かって進んでいるとは言え、まだそれを受け入れられていない信徒もいた。

これからの教会の行方を、皆の心が一致して決めて行かねばならない。その意味でも、クリスマス行事などを通して、教会員一同の和睦と協力をと計ることは極めて大事で、かつまた切実に迫っていることだった。

一回一回の日曜礼拝を大切に、アドベントに相應しいプログラムを吟味しながら、クリスマスを迎えるように役員一同が心掛けていった。

しかし、問題はあった。教会として形が整ってれば、一人の牧師が毎日曜の礼拝ごとに信徒をみことばによって養い、それにそった奨励は出来るが、ここには神学校にも行っていない信徒が、代わる代わるメッセージをするのだから、学ぶことは容易ではない。

日曜ごとの礼拝が終わる度に、次回の説教当番の信徒を囲んで、聖書箇所から選んで学び備えて行く。「三人寄れば文殊の知恵」とは仏教用語だが、結構知恵は出て来る。後になってこれ

が神学校に学ぶ切っ掛けになったことを思うと、すべてが聖霊様の導きだったと知る。

この学びと相談を通して信徒は互いに今までにない親しみを覚え、クリスマスに向かって集会の雰囲気は盛り上がりを見せて来た。こうして迎えたクリスマス礼拝の当日、教会の信徒が家族や友人などを連れて来て、狭い部屋は人で溢れた。

出席者は三十名、これは予想以上の盛況で嬉しい誤算であった。午前中はクリスマス礼拝として、担当に当たったK兄のメッセージと讃美歌の合唱。愛餐会は持ちよった食事を和気あいあいと頂いて、午後からは祝会として讃美歌の独唱や紙芝居、プシゼントの交換など、楽しいひとときを過ごした。

この体験は、皆を同じ気持ちにして、その後の集会の運営上、非常に有益に働いたと思われる。まさに神の恵みを感じたのである。因みに、この集会の名称は「習志野にあるキリストの集会」と名付けた。

忙しい年末の日々、仕事の上でも残業に次ぐ残業だったが、肉体的にはきつくても精神的には満たされて1990年を送り、新年を迎えることができたのであった。

(続く)

刑務所伝道

保坂 義秀長老

神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによって「自分の子にしよう」と、愛をもってあらかじめ定めておられました。

エペソ一章五節

下の挿絵は現在、宮城刑務所で服役中の一兄の作品です。先日、妻の誕生日に贈られたものです。言葉はまじめに彼女が「はこぶね」に書いたもので、去年は色紙に筆書きでしたが今年は写生したのでしょうか、ザクロの絵を添えて下さったのです。

月に二回面会に行ってみことばの養いをして下さっている仙台の佐藤牧師から伝え聞いたところでは、刑務所内でコンピュータや簿記、絵も習って積極的な日常生活、もちろん聖書通信講座も受けていますので、毎日の聖書日課を含め、彼の時間割はけっこう忙しいものようです。

彼が本当に落ち着いて、平安に過ごせるようになった(今でも感情的に波立つことはあるようですが)様子は、他の受刑者の方から見ても明らかで、自分で自分も佐藤先生に面会に来てもらいたいという申し出が最近あっ

て、今は「自分はキリスト教を信じるつもりはないが・・・」という前置きで手紙の遣り取りが始まった所です。

思えば昨年二月、はじめて一兄からミニストリーに手紙が来た時にもそう書いてありました。信じるつもりはない、信じられない、そういう所から徐々に聖書を読み進むうちに、聖霊様の導きとしか言いようのない出来事があった。「神さまの存在がわかった。イエスを信じる」と、まさに光の中へ彼は歩み出したのです。

誰もがそういう道を素直に進めるかどうかはわかりませんが、キリスト教だと知りながらも「文通したい」願いを持った、そこに人間は関わっていません。おくれた聖書と手紙はあっても彼が「信じた」決心に人間は関わっていませんでした。差し出されている神の御手を掴んで救われる人がもつと起こされるよう祈ります。



戦争をするのは・・・(3)

保坂 恭子牧師

そのとき、イエスは彼に言われた。「剣を取る者はみな剣で滅びます。剣をもとに納めなさい。」

マタイ二六章五二節

テレビの国会中継をいつも見てい
るわけではない。でもその私でもかた
ずを呑んで見守っていたのだから、あ
の日あの日ときの視聴率はすこかった
に違いない。元自衛隊のかつてイラク
に駐在してヒゲの隊長なんて呼ばれ
た議員が、先頭にたつて奮闘していた。
この国を、戦争のできる普通の国にす
る法案を通すために。

あの騒ぎを見ていて思った。彼はも
う雲の上の人。他の議員同様、死地に
赴くことはない。戦地に行かされるか
つての部下たちに語る言葉に誠実は
あるのかしら？

国民の多くが「いやだ、いけない」
という法案を、「私は総理大臣だから
私が言うことは正しいのだ」なんて明
言しちゃうひとりの政治家の勢いだ
けで通してしまつたんで、与党議員は
本当にこの国を愛しているんだらう
か。勢いがあるから？次の内閣改造で
閣僚になれるかも？保身か欲か？政

治家には国民の声は聞こえていない
のか、問題外なのか。

憲法九条はノーベル平和賞の候補
にもなったのに、それがここまで踏み
にじられるとは思ってなかった。内閣
法制局は総理大臣の意に添って過去
の見解を一蹴して、学者や社会人、学
生、子連れの若いママたちまでが参加
したデモ、さらに法律家たち、最高裁
判事までが違憲だと反対するの無
視しての強行採決だった。

「貧困や差別といった構造的な暴
力のない状態」を積極的平和主義と提
唱したノルウェーの平和学者は、その
名称を使う安倍首相が戦争法案を提
案したのには驚いたんじゃない？自
分の都合にあうコトバだけパクるな
んて、恥ずかしくない？

太平洋戦争に負けてからの七十年
はムダな年数じゃなかった。苦難は大
きかったけれど、平和を希求するため
に戦争を放棄した尊い志を持つ国と
いう立派な看板と、それによる繁栄
(大いに潤った一部の人たちとそこ
そこ潤った一般人と)を持つ国へと這
い上がったんだから。それなのにまた
どん底へと国民を突き落とすの？

戦争は貧困を引きおこす。一部の
人々には良くて大多数の人々には苦

難(愛国心という言葉で包んで)を強
いる。役に立たないと弱者を差別する。
先の大戦中、戦争に反対すれば非国民
反体制の烙印で社会的に抹殺された。
神を持つゆえにキリスト教迫害はひ
どかった。政治には関わらないとい
うクリスチャンが多いのはそのせい？

戦争はしない、思想信条を理由に差
別してはならないという憲法が発布
されて、みんなが解放されたのに。

今日の戦争で空襲やテロ攻撃に曝
されるのは圧倒的多数の弱者だ。積極
的平和主義とは正反対の構造的暴力
だ。立ち上がった法案は日米地位協定
(安全保障条約第六条)が土台で、こ
れもまた国民的反対を押しつぶして
1960年に国会で強行採決された。だ
から今回の法案成立を、米政府高官は
歓迎すると言ったのだ。

日米地位協定は憲法の上位なの？
現在の沖縄の基地闘争は前途多難？
それが他人事じゃない全日本の見本
だと、あの中継が現実を突き付けたの
に本土じゃそこまで思わない。

国会での強行採決で反対を押し切
るのは数に勝る与党の暴挙だ。選挙制
度があるから一応は民主主義の国。共
産主義国や軍部が支配する国とはち
がうし、かつてのお金で投票や当選が

左右された時代もほぼ終わった。今で
はツイッターなど自由な発言のシス
テムは抑えられないから情報が共有
される望みが大いにある。これからは
選挙にも有効な手段、さらにそのあと
みんなが国政に関心を持ち続けるた
めにもつんと活用してほしい。

日本は戦争はしないとはっきりの言
い切れる国になるチャンスはまだあ
る。この、無理やり通された法案を廃
案にすること。それでこそ民主主義の
国だと胸を張れるんじゃない？

あの国会中継は、私の目に日本的民
主主義の現状を焼き付けた。そのこと
にみんなも自分の意見を持ったはず
だ。眠った民意をたたき起こした結果
は？明確に見たいといま思ってる。

イエス様は十字架への道を踏み出
されながら、「剣をもとに納めなさい」
と仰せになった。剣をもとに納める。
アペノミクスにこまかさされずに、憲法
九条を護る。その意思を示さなければ
平和は作れない。それはキリスト者と
して大人として国民として、次の世代
への責務でもあるはず。

大戦に突入した時代に戻らないた
めに、私はあの日の国会中継を忘れな
い。日本人で良かったと、世界中で言
いたいから。



京大有志の会「声明書」全文

戦争は、防衛を名目に始まる。
 戦争は、兵器産業に富をもたらす。
 戦争は、すぐに制御が効かなくなる。
 戦争は、始めるよりも終わる方が難しい。
 戦争は、兵士だけでなく、老人や子どもにも災いをもたらす。
 戦争は、人々の四肢だけでなく、心の中にも深い傷を負わせる。
 精神は、操作の対象物ではない。
 生命は、誰かの持ち駒ではない。
 海は、基地に押しつぶされてはならない。
 空は、戦闘機の爆音に消されてはならない。
 血を流すことを貢献と考える普通の国よりは、知を生み出すことを誇る特殊な国に生きたい。
 学問は、戦争の武器ではない。
 学問は、商売の道具ではない。
 学問は、権力の下僕ではない。
 生きる場所と考える自由を守り、創るために、私たちはまず、思い上がった権力にくさびを打ち込まなくてはならない。

(自由と平和のための京大有志の会「声明書」)

編集後記 ◎巻頭の神学論文で光についての学びを感謝。聖書的と信じて足をすくわれることもある信仰の基本を野口牧師に教えていただきました◎東畑兄は農村での文書宣教のため神学校で学ばれました。ますますのお働きを祈ります◎大家姉、植草師ともに試練は恵みの証し。感謝◎刑務所伝道のためお祈りください◎平山師は次いで「日本初のキリシタン大名大村純忠」を予定◎【森のケルト】第十一話は近日中にアップします。緊張の続く少年たちの冒険をHPでぜひ。Y・H記

左下の「自由と平和のための京大有志の会「声明書」全文を平仮名しかわからない小さな子のためにと3人の子をもつ山岡さんが「こども語訳」(右下)にしました。有志の会HPでそれを見た絵本作家の塚本さんがすぐに絵本(左上)にしました。次の世代に平和を引き継ぎたい二人の思いが言葉と絵に結実したと、朝日新聞の天声人語で見つけました。

このお二人のすばらしい平和運動が、今風に軽やかに実行されたことに希望を持ちます。埼玉県在住で広島出身の男性の子どもたちへの思いが京都の大学のHPに届き、両親が東京大空襲を経験した絵本作家がそれに目を留めて緊急で絵本を出版して。本屋さんが減ってしまった町ではなかなか買えないけれど、アマゾンなら翌日に届く今日この頃。

顔を合わせて会議と相談？なんてこと必要ない。住む所も年代も関係ない。大事なことは決めたらすすべやろー！という行動力からして眩しい若さです。正しい願いだと確信した行動は優れた発信力を持ち、感応されて拡がっていく。デモもそうですが、この感性は新時代の夜明けを見せてくれます。

わたしの『やめて』

くにとくにのけんかをせんそうといひます
 せんそうは「ほくがころされないように さきに ころすんだ」といふ だれかの いいわけで はじまります
 せんそうは ひとつごし の どうぐを うる おみせを もうけさせます
 せんそうは はじまると だれにも とめられませぬ
 せんそうは はじめるのは かんたんだけど おわるのは むずかしい
 せんそうは へいたいさんも おとしよりも こどもも くるしめます
 せんそうは てや あしを ちぎり こころも ひきさきます
 わたしの こころは わたしのも
 だれかに あやつられたくない
 わたしの いのちは わたしのも
 だれかの どうぐに なりたくない
 うみが ひろいのは ひとをころす きちを つくるためじゃない
 そらが たかいのは ひとをころす ひこうきが とぶためじゃない
 げんこつで ひとを きずつけて えらそうに いばっているよりも
 こころを はたらかせて きずつけられた ひとを はげましたい
 がっこうで まなぶのは ひとつごし の どうぐを つくるためじゃない
 がっこうで まなぶのは おかねもうけの ためじゃない
 がっこうで まなぶのは だれかの いいなりに なるためじゃない
 じぶんや みんなの いのちを だいじにして
 いつも すきなことを かんがえたり おはなししたり したい
 でも せんそうは それを じゃまするんだ
 だから
 せんそうを はじめようとする ひとたちに
 わたしは おおきなこえで「やめて」というんだ

(じゆうと へいわの ための きょうだい ゆうしの かい)